
FDの中のキミ

彩夜仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FDの中のキミ

【Nコード】

N0630A

【作者名】

彩夜仁

【あらすじ】

PCによるネットワーク構築が厳格化された近未来。人々はPCの前にいながらどんなことでも出来るようになっていた。そんな電脳社会に生きる一人の少年は、ある日自分のPCに不審な大容量ファイルがあることに気付く。そしてそのファイルを開いた瞬間……。

FILE:1【全ての】謎のHDD容量圧迫現象への答え【始まり】

FILE:1【全ての】謎のHDD容量圧迫現象への答え【始まり】

今日も僕はいつもの日課とばかりにPCを立ち上げ、小説を書いていた。

思ったことをつらつらと画面に打ち込んでいくうちに何となく、『小説らしきもの』が形を持ち始めていく。

打ち込む、といっても実際にキーを叩く訳ではなく、PCの筐体から放射されたホログラムに向かって指を触れる（実際に触れていないのだが）だけで対応した文字が画面に描写されるという仕組みだ。俗に言うホログラムタッチという奴で、最近のPCには標準搭載されているインターフェイスでもある。

僕が生まれてもう十四年という月日が経ったが、その間に時代は目まぐるしく変わっていった。

二十一世紀も四半世紀を過ぎた頃、ある科学者が『世紀の大発明』をしたのだ。

それはユビキタスの概念を根底から覆すものだった。

それは簡単言えば、PCを通じてネットワークにログインする「家の外に出る（外出する）」と置き換えても過言でないという仕組みであった。

・まあ僕も詳しい仕組みは知らないんだけど。

要は家にいながらどんな事だって出来るってことだ。

世の中便利になったものだ。

・・・・何かおじさんみたいなこと言ってると思ってる？
しょうがないさ。

あまり一度に技術革新が起こってしまつて利用者側が時代に追いついていないというのが現状なのだから。

そいでもって今年は2029年。
話を元に戻そう。

そんなこんなで僕はいつものように小説を書いていた。
小説の内容は……。

まあ稚拙なものだ。

一段落して今まで書いたものを保存しようと僕は保存シグナルをP
Cに送った。

しかし戻ってきたのは『エラー！神経接続中の家内ネットワーク
の母体記憶容量が足りません』というメッセージだった。

……そんな馬鹿な。

つい最近培養増設したばかりなのに。

僕はHDDのプロパティを開いて容量計を表示させる。

『総容量17.2TB / 空き容量23KB』

どわっ……

なんだコリヤ。

KBなんて単位初めて見たよ。

一体何がこんなに入ってるんだ？

人格データを新規インストールしたときよりもぎちぎちだ。

僕はそのまま詳細なファイルメニューを具現化させ、謎の容量圧迫
の原因を探ってみた。

……これだ。

やたらとでかいファイルが見つかった。

「miu.exe」というファイル名の実行ファイルだった。

僕はそのファイルを迷わず具現化した。

その瞬間、僕の目の前（と言っても立体映像なのだが）に女の子が
現れたのだ。

うわぁ！何なんだ！

髪が長く、とつても肌の白い女の子だ。

今時天然記念物並みの綺麗な娘だった。

「き……きみだれ？」

僕は恐る恐る聞いていた。

「わ、・・・私は・・・」

その女の子は機械合成で生成された綺麗なwaveサウンドで声を出力してきた。

五感神経パルスの『聴覚』の分野別メモリを殆ど食い潰すくらいの美麗な声だった。

「私は・・・ミウ」

『ミウ』と名乗った少女はにっこりと微笑むと今度は僕の名前を聞いてきた。

お互いの自己紹介を終えたところで僕は彼女に質問した。

「キミ・・・どこからウチのLANにハックしてアクセスしてるの？」

そう聞くと、彼女は『は？』といった顔で聞き返してくる。

「すいません・・・それはどういう意味でしょうか？」

「えっと・・・つまりキミは今ホントは何処か別の場所にいて、それで僕の場所に一時的に遊びにきてるってこと？」

「・・・私は、・・・誰なんでしょう？」

突然彼女はちんぷんかんぷんな事を言い出す。

「・・・はあ？」

「私、自分の・・・名前しか覚えてないんです・・・」

「・・・そ、そんなこと・・・」

聞いたことが無い。

名前しか自分の事が分からない？

そんなこと、あるはずが無い。

「ちょっと待ってよ、キミのライブラリーは見たの？」

「らいぶらりー???」

少女は首を傾げる。

ライブラリーというのは、電腦社会で生きていくために必要な自分に関するあらゆる情報が詰まっている自分専用のデータベースみた

いなものの事だ。

古い言い方をすれば個人情報に相当するものだ。

無論今ではセキュリティは万全で神経接続する際、身体の外・内部を問わず、

その人の特徴全てがライブラリーを開く『鍵』となっているので本人以外が閲覧することは絶対に不可能だ。

「すいません・・・わからないです」

「うん・・・キミ、ホントに電脳社会の住人なの？」

「・・・それも、わからないです・・・」

「基本操作も知らずによく僕のLANにハックできたね・・・うちの暗号強度1024bitなんだけどな・・・」

まぐれでそんなこと出来るはずないことぐらい僕にだってわかる。

とするとこの娘は一体どうやって・・・？

「とりあえずさ、キミのホームスペースに連れて行ってよ」

「ほーむすぺーす??？」

「うん・・・要するにキミのお家だよ」

「おうち・・・私にはおうちはありません・・・」

「嘘・・・」

ホームスペース無しでどうやってwwwにログインしたんだ??

それは例えて言うなら指紋の無い人間が指紋認証を終えてゲートに入ることに同じくらいにおかしなことだ。

・・・謎だらけだ。

突然僕のPCに現れたかと思うと、迷子の迷子の子猫ちゃん状態とは（古い）。

どうしたもんか・・・

「行くところ・・・無いんだ？」

「・・・はい」

「じゃあさ、暫く僕のPCにいてよ」

「良いんですか？」

「うん、まあ容量食いまくってるけどキミの事ほっとけないないし」

「ありがとうございます！」

ミウは勢い良くお辞儀をしてお礼を言った。

それから僕とミウの奇妙な電腦生活が始まった。

朝起きてログインすると、僕のPCのデスクトップにはミウが画面に凭れるようにして眠っている。

「おーい・・・ミウ・・・朝だよー」

僕はヒューマンインターフェイスの『ハンド』を起動させて彼女の肩を揺すってやる。

「・・・ん・・・んゝはあ・・・あ、おはようございます」

思いつきり伸びをして彼女は眠たい目を擦りながら僕に挨拶する。そうして、僕とミウの一日が始まるのだ。

学内LANにログインして授業を受けている時も、友達のホームスペースでチャットをしている時にも、ミウはタスクフィールドに常駐して僕を見ていた。

あれからまたHDDの増設をし、物理メモリも三倍のものに変えた。お小遣いがかなり寂しくなってしまったが、それもこれも、皆ミウのためだった。

ミウをずっと自分のPCに常駐させておきたかったから。

快適に動作させておきたかったから。

いつしか、僕はミウに夢中になっていたのだ。

そしてそれが、僕にとって思わぬ『真実』を暴くきっかけになろうとは、この時の僕は知る由も無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0630a/>

FDの中のキミ

2010年10月9日00時45分発行